婦人と子供

第五卷
第六號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。

但寄稿投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年六月二日印刷
同　年六月五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區飯山町四丁目十二番地　久保田龍一
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京　東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

不許復製

會告

本月十七日(第三土曜日)午後一時半、京橋區築地本願寺前朝海小學校附屬幼稚園に於て第三十七常會相開き申すべきに付き萬障御排除御來會相成りたく候

追つて會場へは市街鐵道の便宜有之候。

明治卅八年六月五日

フレベール會

會員御中

幼稚園保育法

夏期講習會

本會は幼稚園の發達及其保育法の進歩改良の目下の急務なるを感じ左記の要項に由りて夏期講習會を開く。

明治三十八年六月　女子高等師範學校附屬幼稚園内　フレーベル會

一、學科及講師

保育原論　女子高等師範教授　中村五六

幼兒の躾　華族女學校助教　野口幽香

兒童學大意　女子高等師範教授　黑田定治

兒童個性の研究及其取扱法　東京高等師範教授　松本孝次郎

幼稚園の唱歌及幼兒に唱歌を授くる方法につきて　女子高等師範保姆　下田鶴

幼兒の活動性及童話につきて　女子高等師範教授　東基吉

一、講習期限　來ル七月二十一日ヨリ十日間

一、會場　東京市神田橋外東京府教育會内

一、會費　金一圓　但しフレーベル會々員ニ限リ半額

一、聽講手續　聽講志望の向は會費を添え女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會宛て申し込むべし。但し會場の都合もあればなるべく速に申込を要す

婦人と子ども第五卷第六號目次

子ども

蠶豆と赤石……一
烏の智慧……八
お話大臣……九
ありとはと……一九
むしのこゑ……一九
懸賞考へ物……二〇

婦人と子ども

幼兒個性の觀察法及取扱法につきて……松本孝次郎……二三
子供と間食……ひむかし……三〇
貞一の日記……その母……三二
婦人と親族法……太田英隆……三六
割烹……石井泰次郎……四一
孤燈獨語錄……獨語子……四三
愚感一束……平岩繁治……四五
フレーベル會俳句端書集……鹽野哥零……四八
薩摩守忠度……林天然……五一

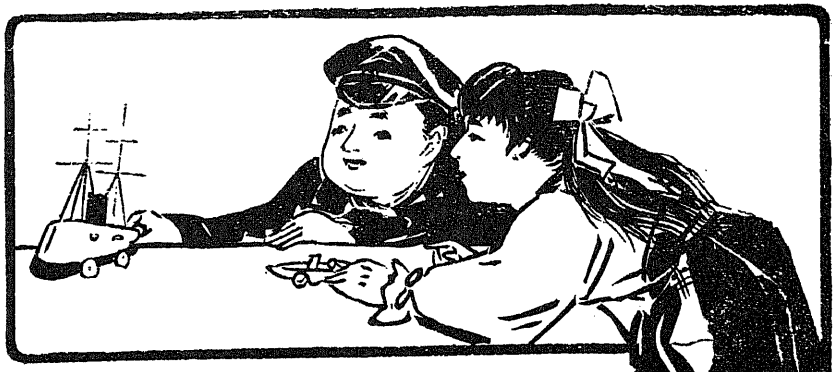
保育者のため

幼稚園に於ける自然研究……平山ひさ……五二
井上博士の幼稚園談……五四

雜報……六〇

幼稚園保育法夏期講習會○京北幼稚園○足立孝子の名譽

會報……六二



婦人と子ども

第五卷第六號

蠶豆と赤石とのお話

やまとの翁

暖い春の朝のこと、裏の畑で、小さな話し聲がして居ます。一人は蠶豆で、も一人は小さな赤石です。何をいってるかと聞いて居ますと、こんなお話でした。

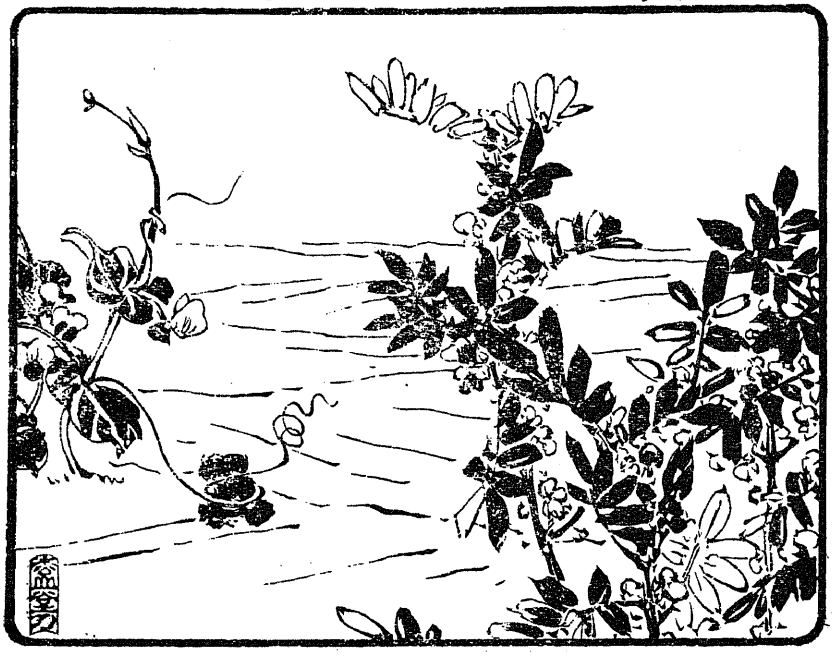
「こう見えても、僕は世の中に立って、する事があるよ」

豆が小さい聲で言ひますと、赤石は、吃驚した樣な聲で

「ぢゃ、君は何が出來ると言ふんです」？

と問うて居る。豆は

「さうさ、僕は生長くなることが出來るんだ。僕は豆だらう。だから、春になると生長くなるに決つて居るさ」



「へえー、其生長くなるってのは、一體どういふことなんです」？
如何にも理解らないといふ樣な句調で、赤石が尋ねます。
「おや〳〵、君は生長くなるってことを知らないの？、僕は、是位なことは、誰だって知らぬものはあるまいと思ってた。ぢゃ！いって上げよう。まづこうさ。第一番に僕の根が土の中に這入って行く、これは、水を飲む爲だよ、それから僕の莖は空に伸び上って行くが、これは温まる爲めだ。濕氣と温熱とは、まあ僕の食物といふ譯さ。
そんな具合で以て、だん〳〵大きな植物になるんだが、さあそうなると美事なもんだよ。ねえ君　地面の中では根が、そこからこゝへと這ひ込んで行くし、空では莖が四方八方に枝や葉を擴げる、

そこで僕毎日面白い物など見たり聞いたりするんだ、あゝ何だか、其時のことが、今から待ち遠くって待ち遠くって仕様がないなあ」

赤石は怪訝な顔付をして

「君の言ってることは隨分奇態じゃないか、其證據は僕は、今までこの一つ所に、何年といって居るのだが、ちっとも生長くならないよ、僕には根もなければ莖もない、あるんかも知れぬが、君のいふ樣に、上向ひたり、下向ひたりして動き廻はるなんていふことはない樣だ、君間違ぢゃありますまいな!?

「大丈夫、間違ふもんか、實際僕は自分でも生長くなる樣な心地がするもの、夫に、大分水氣を取ったから、もう直始めるよ」

話してる中に、豆の皮が端からパッと二っに割れました。赤石は

吃驚して見て居ますと、豆は、皮の中から割れて出た二つの袋の様なものを出して見せて

「赤石君、この二つはね、子葉といつて、そら僕が初めて根を下しかけた時分に見える、二葉なんだよ、こん中に僕の食物があつて、夫で以て僕が生長くなるんだ。尤も、僕の葉が大分生長くなつてくると、もうこんなものは要らないから、そうなると、この二葉は枯れて仕舞ふ。君、もっとづっと倚つて二葉の中を見給へそら眞中に小さな心が居るだらう、これが芽なんだよ、半分が根になって、半分が莖になる、ね君、分ったか？

「なる程、小さな白い塊が居る樣だな、けども、そんなものが、根や莖になるなんてなことは、僕にはさっぱり合點が行かない」

「ハハー、石なんてものは、どこまでも可愛相なもんだな、して見ると、僕等の生長くなることが、どんなに面白いかといふことも、君には分るまい、僕は石なんかになって居るのは嫌なことった、年から年中一っ所に居てさ、そしてじっとして何もしないで居るんだもの、夫よりか僕は日向に枝でも擴げて、暖い甘い春の空氣を葉で以て吸ひ込むんだ。」

「君の言ふことは丸で無茶苦茶ぢゃないか、僕にはさっぱり分らないもの」

其中に豆の方は石に搆はず、づん〳〵伸びて行きました。そして丁度今の先豆の言った樣に、根は地面の中にぐい〳〵と押し込んで行って、しきりと水っ氣を吸ひ込むと、やがて、此水氣が莖の

方へ廻って行くので莖は生々と空向ひて伸びて行って、うね〳〵とした蔓の手は、ピシヤリと赤石を抱きこんで仕舞ひました。そして枝一面に白い花が咲き始めた。そして

「やあ、愉快だなあ」

といって居ると、赤石は、キヨロンとして

「へえー、君、成長きくなるってのは、この事ですか？僕はたゞ君が惡戯に言ってるのかと思ってた。なる程、立派だなあ君は」！

二人のお話はこれで濟むで仕舞ひましたが、夫から蠶豆は夏になって澤山な實がなり、其中に又莖は枯れて仕舞ひましたが、赤石は元の儘、生長くもならなければ、動きもせずに、依然として元の處に居りました、來年の春頃になったら、又同じ樣なお話が二

人の間に始まるかも知れません

（おしまひ）

一羽の烏が、咽喉が乾いて水を飲みたくってゐると、いゝ具合に水の入ってる瓶を見付けました。さて其瓶から水を飲まうとしましたが。困ったことには、半分もないと見えて嘴が屆かない。そこで、一寸考へて、近くから、石を一づゝくわへてきては、瓶の中にいれて居ますと、水がだん〳〵上の方に上ってきて、もう〳〵夫を飲むことができましたとさ

お話大臣

太田龍東

第四　鬼神の妻

妖怪が太刀を振上げて、文雄の腕を斬らうといたしましたとき、僧侶が二疋の可愛らしい犬を連れて參りましたが、今文雄が斬らうとするを見て側により、

『甚麽理由か知らないが、この人を斬るのは暫らく待つて下さい。私は僧侶の身でありますから、人の斬られるのを見れば、之れを助けねばなりません、什麽その理由を一通り聞かして下され。』

と申しますと、妖怪は又邪魔ものが來たかと云ふやうな顏附で、その刀を下げながら、文雄が俺の弟子を殺したゆへ、其仇を討つことを話しました。すると僧侶は

『那麽では、拙僧が餘程不思議な身の上話をしますから、この人の罪を宥して遣つて下さい。』

と賴みました。妖怪は元より話好きでありますから、早速承知いたしました。僧侶は說敎口調で次のお話しを語り出したのです

私には二人の兄弟がありまして、今これにおります二疋の犬が即ち兄弟でムいます。私の父が死にますときに、私等三人の兄弟に、金五千圓を分けて與へられましたから、皆思ひ〳〵のことをいたしたのですが、二人の兄弟は、放蕩をして一年の間に、その金を悉皆無くしてしまいました。しかたがありませんから、暫らく私の家に養つて遣つていますと、二人のものは惡心を惹起まして、私を殺して財產を分取せうと相談いたしたのでムいます。

ある夜私と妻が、二人睡てゐる透を伺ひまして手足を縛り二人とも海の中に投込みました。すると、私の妻は奇術を知つてゐるものと見へ、魔術を行ひて私の身を抱き、海中の一孤島に飛んで行きました。しばらくすると夜は明け東の空は白んで、太陽の光りは海波に映つて赫々として參りました。その時妻が私に向つて申しますには

『妾は、足下が今の禍難

あることを元からよく存じてゐました。正直な足下が、こんな禍難に遇ひなさるを氣の毒に思ひましたから、先日足下の妻となつたのです。それで今日この禍難を救ひましたなら、お暇乞をする都合で厶います。』

私は、これを聞いて大に驚き、

『貴女が今日私の禍難を助けて呉れたのは、有りがたい事であるが、今になつて何故私と別れるの

か、又魔術は什麼して知つてゐるのか。』

と云ひますと、妻は

『足下は、まだ妾の身分を知らないから、不思議なのも無理はありません。妾は元人間ではなく、世の人の云ふ鬼女で厶います、妾は過去の世に於て、足下に助けられたことのあるものでありますから、その御恩返しに、今日お助け申しました。』

と云つて妻は涙を流し、暫く泣いてゐましたが、又口を開いて

『こゝで彼是申してゐましても、仕方がありませんから、之れから宅まで歸りませう。私が烏になつて、足下を乘せますからお乘りなさい。』

と云ふかと思ふと、妻はすぐ大きな鶴になりました。私は其妻の鶴に乘りますと、鶴はバア〳〵と立つて、廣い〳〵青々とした海を、見る間に渡つて私の家の屋根の上に下りました。すると鶴は元の人間になつて、私に申しますには、

『足下は、生命は助かりましたが、二人の兄弟を殺さないと、又甚麼ことをするか解りません。那麼で、妾がこれから下りて生命を絶つて參ります。』

と云つゝ下ようとしますから、私は急いで止め、『私を殺さうとした兄弟の心は憎むべきであるが、我が血を分けた同胞だから、殺すことだけは免るしてやつて下さい。』

と云ひますと、妻は

『それでは、足下のお慈悲によつて殺すことだけは止め、獸に化しては如何ですか。』

と云ひますから、私は

『那麼ならばよろし　が、一生畜生の姿として、

終らせるは實に可哀そうでならない。』

上申しますと、

『そんなに申されるなら、今から先十ケ年間淺ましき畜生の姿となし、其罪を罰してやりませう。』

と云つて、屋根を下りて參りました、私は屋根の上は暫時待つてゐますと、施て妻は再び登つて來まして

『さあ下りて下さい。』

と申しますから、下りて家の中に這入つて見ますと、二頭の犬が、私の側に駈來りて、足に纏はつたり袖を嚙へて尾を振つたりして、さもなつかしそうにします。私もこれが兄弟かと思へば可愛そうになり、暫らく犬を見詰めゐました

すると妻が側に來まして、涙を流しながら

『足下、妾はこれでお暇いたしますから、隨分御

丈夫でお暮しなさい。さよなら。』

と云つたと思ふと、妻の鬼女は、姿を搔消すやうに蜻蛉の跡も止めず失へてしまいました。

私は、其鬼女の所在を尋ねる爲め僧侶となり、この兄弟なる犬二頭を連れて、諸國を巡つてゐる內、端なく此所を通り合せたものでゐます。

之れを聞いた妖怪は、

『儞の話は實に奇怪で、餘程面白かつたそれでこの男の罪の三分の一を更に免るし、腕と脚を斬る所を、今の話により腕だけ止めて今度は脚を斬るから、さあ脚を出せ。』

と云つて、又刄を振り上げて文雄の脚を斬りかけました。

花太郎は、こゝまで話して王に向ひ

『我が王樣よ、日が暮れかれましたから、今日は

これでお止めに致しませう。』
と申して、室へ下りました。

第五、兄弟の約束

かの哀れなる文雄は、今妖怪が振り上げし一刀のもとに、その脚は將に斬りやらうとしました。すると又こゝに一人の、花のやうな美しい十七八の娘が遺つて來りました。今參りましたこの美しい娘は、斬られかけてゐる文雄の妹なので、文雄が魚釣に出たぎり、餘り長く歸らないものですから、心配してこゝまで迎へに來たのであります。迎に來て見るとこの有樣ですから、娘はすぐ妖怪の側に參り、泣きながら申しますには

『若し、暫らく待つて下さい、これは妾の兄で厶いまして、妾はその妹の雪江と申すもので厶います、兄が甚麼惡いことを爲たか存じませんが、惡い所は幾重にも謝りますから、切望免して下さい。』

すると妖怪は、文雄が俺が弟子を殺したことや、この二人が面白い話をした爲め、その罪の三分の二を免し、いまその殘りの罪を罰せうと思つて、脚を斬るのであると云ふことを語つて聞かせました。

娘は、側に人のあることに初めて氣が附きまして

『お二人とも、何所のお方かは存じませんが兄の爲めに、いろ〳〵お骨折つて下さつたさうで、有りがたう存じます。』

と禮を述べ、又妖怪の方に對つて

『もし魔王樣、このお二人がお話し成れたゆへ、兄の罪の三分の二をお免し下つたのなら、今妾が

お話一つ申上げば、殘りの三分の一の罪を、お許し下さいませうか。』

と恐れ〳〵申しますと、妖怪は、今日は話しをする人のよく來る日だな、と云ふやうな顏附きで、『お前のやうな、可愛らしい娘の子がお話するなら、兄の罪は悉皆免してやる、さあ早く聞かしてお呉れ。』

と云つて、今までの恐ろしい風は何所へやら無くなつて、娘の顏を見てニコ〳〵笑つてゐます。娘の雪江は、大層喜びまして、椿のやうな可愛らしい口から、鶯の囀づるやうな清らかな聲を出して、次のお話をいたしました。

むかしある所に、二人の兄弟がありました。兄を松雄と云つて、弟を梅雄と云ひます、この二人の仲のよい事と云つたら、口では申されない程でゐます。學校に行くにも二人連れ、遊ぶにも二人連れ、寢るにも二人連れ、ご飯食べるにも二人連れ、又お使ひに行くにも、二人連れと云ふ風に、何時も二人は鎖のやうに連鎖て、離れたことはありません。

そこで、二人が約速をしたのであります。それは甚麼約束かと申しますと、もし一人が居ない時は、面白いことがあつても爲いで、二人になるまで待つてゐると云ふことであります。

ある時、兄の松雄は、一羽の鸚鵡を買つて參りました。この鸚鵡は、人の話しをよく聞き、又其目の前で出來たことは、甚麼ことでも記憶てゐて、人に精しく語る名鳥であるから、大層重寶な鳥でゐます。松雄は、この鳥を自分等の居間に飼置て、自分の留主の間でも、弟の梅雄が、二人の約

束をよく守つて、面白いことがあつても、一人で爲ないで待つてゐるかゐないかを、試めして見るに都合がよいと、嘻んで大切にして養ひました。が弟は、そんな事とは知らず、只普通の鳥だと計り思つてゐたのです。

恰度日曜の日でした、兄の松雄は、少し用事があつて、一人で三里程離れた田舍の、叔母さんの所へ參りました、梅雄は、兄が留守ですから、一人で居間にゐて本を讀んでゐますと、お友達の憲太郎と云ふのが、遊びにやつて來ました。

『梅雄さん、今日は君一人ですか、兄さんは什麼して。』

と尋ねますから、梅雄は

『憲さん、今日はね、兄さんは叔母さん所へ住つたから、歸へるまで遊び給へな。』

と云ひました。又憲太郎は

『不錯、何時頃歸つて來るの。』

と尋ねると、梅雄は

『今日晩でなけゐ歸りませんよ。』

と答へました。すると憲太郎は

『梅雄さん、今日はお休みだから、お芝居に行かうと思つて誘ひに來たんたが、松雄さんが居ないのは殘念のやうに思はれるけれど、留守なら仕方がないから、二人で往うじやないか。』

と勸めますから、梅雄は、二人でないと何所にも往かれないやうな、約束が兄としてあるから、今日は止めにすると云つて斷はりましたが、憲太郎が餘り勸めるものですから、梅雄も遂に其氣になつて、兄に內密で芝居見に參りました。

梅雄は、午後からの五時頃、芝居から歸つて、

何知らぬ顔してゐますと、兄の松雄は、弟より一時間程先に歸つて、弟が憲太郎と二人で、芝居に往つたことを聞いて、詳しく知つてゐますから、弟に對つて

『汝は、今日何所に往つてゐました。』

と尋ねますと、弟は

『お友達の所へ遊びに往つてました。』

と答へます。兄は大層怒りまして、憲太郎と芝居見に往つたことを詳しく話し、約束をして置きながら、それに背くのはよくない事であるから、將來約束を守るやうにと誡めました。

梅雄は、誰も知つてゐる人は無い筈であるのに、兄が詳しく知つてゐましたから、不思議で堪りません、其後いろ〳〵考へた末、鸚鵡が告げたことを知りました。そこで梅雄は、什麼かしてかの鸚鵡に、其讎を復へしてやりたいものだと、夜も晝もそれ計りを考へてゐますと、恰度兄の松雄は、用事のため一夜泊りで、又叔母さんの所へ行きました。

梅雄は、這麼ときに仇を討たねば、討つときは無いと思つて、一つの工夫をして、憲太郎と二人で、面白い仇討をしました。

夜中頃に、憲太郎は鸚鵡の這入てゐる籠の下に潜んで、粉挽臼を烈しく、ゴロゴロ〳〵と挽鳴して、恰度雷の鳴るやうな音をさせました。すると梅雄は、時々籠の上から、滌瀘を以て水をザア〳〵と、大雨の降るやうに濺さかけ、次に一方では、遠方から鏡を以て、洋燈の光りを鸚鵡の目の前に、右と左からキラ〳〵と、恰度電光りのするやうに反射しました。

さサ恁うなつては鸚鵡は大變です、家の中に俄かな大きな夕立が遺つて參りまして、頭からは大雨がザア〳〵とかゝる、雷はゴロゴロ鳴る、電光りはピガ〳〵眼を射すのですから、誰だつて堪つたものではありません、逃げふと思つても、籠の中の鳥ですから、自由にならず、泣くにも泣かれずと云ふ風で、鸚鵡先生は大閉口をしております。梅雄や憲太郎は、早く止めてやればよいに、可哀さうに夜の曉けるまで、繰返し〳〵て雷さまや雨降りの役を遺つてゐたのです。

松雄は、翌日歸つて參りまして、人の居らぬを幸ひ、直ぐ鸚鵡に對つて、昨夜の出來でとを尋ねますと、鸚鵡は涙聲で

『若且那樣よ、私は昨晩のやうな目に逢つたことは厶いません。私の嫌いな雷はゴロ〳〵止み間なく鳴り、大雨はこの室まで降り込んで、頭の上からザア〳〵とかゝります、電光りは烈しく光つて、朝までの難儀は、私の口では申上げられません。』

と申します。松雄は之れを聞き、大層怪しく思ひ、昨夜は近頃ない晴天で、星は降つたかも知れないが、雨の降るやうな天氣ではない。それに時候は冬であるのに、雷鳴の音がする筈はない。それであるに、鸚鵡は大雨が降つて雷が鳴つたなどゝ云ふのは、畢竟我を僞り欺くのであらふ。して見ると、先日弟が芝居に往つたと云ふのも皆僞りで、無いことを誠らしく功名顔のやうに語つたのに相違あるまい、と思ふと松雄は俄に腹が立ち、前後の考へもなく、かの鸚鵡を籠の中から引出し、力任せに庭石の上に、ハタと投付けましたから、可哀さうに鸚鵡は、其儘息絶へて終いました。

其後松雄は、暫らくして近隣の人に、鸚鵡の言つたのは虚言でなく、弟の梅雄が、芝居に往つたのが實であることを聞き、松雄は後悔しても、過ぎた事ですから、詮方がありませんでした。

娘の雪江は、右の話しを濟まして妖怪に對ひ、

『妾の話は、這麼面白くないもので厶いますが、これで終りましたから、什麼か、兄の罪を免して遣つて下さい。』

と賴みますと、妖怪は、

『それでは、全く罪は免してやる。』

とこれだけ云つて、見る間に其姿は烟のやうに消失てなくなりました。

この時文雄の欣喜は甚麼であつたでせう。猛虎の口の中から、脱れたやうな心地して、天に歡び地に欣喜び、手の舞ひ足の踏をも知らないばかりでした。三人の人も共俱に喜び、迭に慰め慰められてゐましたが、何時まで恁うしてゐる譯には參りませんから、別れを告げまして、文雄は妹の雪江と我家に歸りました。

花太郎は、話し終りまして王に對ひ

『我が王樣よ、これでこのお話しは終りました。』

と申しますと、王は

『朕は、今迄こんな面白いお話しを聞いたことは無つた。汝は話が上手だから、今日から話大臣と云ふ位を授ける。』

と賞められて、花太郎は、大臣の位になりました とさ

（めでたし〳〵）

ありとはと

向ふの木の枝に、鳩が一羽止って居るのをみつけて、鳥さしが、長い竹の端に、もちを付けて、下からそーっとささうとしました。

すると、地面の上を這つて居た蟻が一匹、鳥さしの足の甲に這上つて來て、思ひ入り喰いついたので、鳥さしは、びっくりして、『あいたっ』といったなり、持つて居た竹の竿をおとしてしまひましたので、鳩も始めて氣がついて、『あゝ危なかった』といって、高い枝へ飛び上りました。

夫から二三日たって、この蟻が、水たまりの中に落ちて、あぶ〳〵といってなんぎして居ますと、上の木の枝に居た、以前の鳩がみつけて、『オヤ〳〵かわいそうに』といって、其木のはを一枚おとしてくれましたので、蟻はやっとこのはに、しがみついて助かりましたとさ。

むしのこゑ

ねーさんおきゝよ　むしのこゑ
ちんちろりちんちろり　ちんちろり
やさしいおこゑは　まつむしよ」
かあさんおきゝよ　むしのこゑ

りーんりんりーんりん　りんりんりーん
すゞしいおこゑは　すゞむしよ」
にーさんおきゝよ　むしのこゑ
かしゃかしゃかしゃかしゃ　かーしゃかしゃ
さわいでなくのは　くつわむし」
みんなのないてる　そのなかで
はたるはひとりで　おとなしく
だまつてあかりを　ともしてる

懸賞考へ物

私は、この「婦人と子ども」を、高等小學四年の頃から非常に愛讀して居ます。このたび、同村に、同姓同名がありまして、其れに生れも私と同じ年（明治二十二年二月生）諸事差し支へますから、とき子を登喜子と改名いたしました。夫で改名披露の爲、小さい方の御慰までに次の樣な懸賞考へ物を出しました。

題

(1) 十六を三分して　我國の中一國名
(2) 二十を三分して　我國の中一國名
(3) 九を二分して　我國の中一國名
(4) 十三を二分して　我國の中一鳥名
(5) 二十三を三分して　我國の中一國名

◎答は兄さんや、姉さんに書いて頂いても宜しい。
◎お答の中に、郵劵四錢を添へて送つて下さい。
◎甘くお答の出來た方で、五、十と云ふ節に當つた方には、景品を差し上げます、御添附の四錢は、景品送附料に致す考へであります。
◎番號は到着順にします。
◎特に第壹番の方へ「ふみのかきふり一部」小野鷲

堂書、第五拾番の方へ「文章軌範一部全四冊」、第百番の方へ「啓蒙日本外史一部」、第百五拾番の方へ「言海一部」

◎御通知のなき御方は、答が違つてるか、又は、節番に當らなかつたのだと心得て下さい。

◎申込所　三河國西加茂郡筋生村字黒笹

近藤登喜子あて

◎解答紙　隨意

◎期限　七月五日限りとす

◎披露　八月發行の「婦人と子ども」紙上

以上

近藤登喜子

五月の二十八日は、地久節といつて、皇后陛下のお生れあそばされためでたい日なんですが、ちょーど、、、としのこの日に、我が海軍が敵のみールチック艦隊を全滅させたのは、なんといふ、おめでたいことでせう

婦人と子ども

幼兒個性の觀察及取扱法につきて

松本孝次郎

今日この席で保姆諸君に御話をするを得たのは誠に好い機會である、保育に就いては我々は絶えず我國の保育事業の進歩を希望して居る、このためには或は講演に或は演說に常に我々の希望するところ注文するところを述べて居るが凡て何事も刺戟がなくては發達の出來ぬものであるから、若し我々の平常心がけて希望し注文して居ることが諸君の刺戟となつて幾分か其効果を奏するをがあるならば幸である、本日の如きは幸、好機會を得たのであるから聊希望を述べて多少の御參考にいたしたいと思ふ。

扨、今日諸君に希望するとは兒童の個性につき特に注意すべき一二の問題につきての研究である、或る學說として諸君が研究せらるゝとは保育事業の基礎となるもので、もとより必要なことではあるが、扨實際に當つて見るとなか〳〵學理通りに行かぬことがおほい、斯く學理と實際とが時々衝突をするのは種々の原因に基くが、其原因中の重要なる一つは確かに幼兒個性の相異れるとである、完全なる保育法とは保育の一般原理に適合すると同時に幼兒個性の保育上にも滿足を與ふべきものでなくてはならぬ、この一方を缺くものは到底完全なる保育法たることが出來ぬのである、然るに現今保育上又教育上著しく缺けて居るのは個性の研究である、個性に對しては如何なる取扱をなすべきかは實に今日の教育上の問題なので、今日諸君に希望するのは保姆諸君の精密なる觀察によつて幼兒の個性を余程確實に了得し、これに對して最も適切なる保育法を研究せられんとである。

これより幼兒個性の觀察法を述べようと思ふが、この方法は分類すると左の四通りにわかるゝと思ふ、

第一　身体上の狀態より個性を觀察する法

第二　精神上の狀態より個性を觀察する法

第三　道德的性質より個性を觀察する法

第四　教育上より個性を觀察する法

以上四通りの觀察法があるが極めて短時間で我希望を述べ終らんがため要點のみをつまんで話さうと思

ふ、

第一、身体上の狀態により個性を觀察する法。この方法上私が希望するのは現今行はれて居る身体檢査の結果をいま少し教育的に有益にしたいのである、即ち身長は幾ら体重はいくら、視力は如何、身体の組織は如何、などいふことがたゞ一葉の表としてとらるゝ計りでなく、何かに利用したいと思ふが其利用の一として個性觀察の上に用ひたいのである、即ち身体各部の發達が一致して居るか、言語は生理上よりの關係なきか、音樂思想と聽覺との關係は如何等を發見するは皆身体上の觀察の主なるものである、

第二、精神上の狀態より個性を觀察する法、精神上の觀察より個性を發見する方法は諸君に直接なるものが多い、即ち感覺機關が相當の發達をして居るか、又は何等の缺損がなきか等いふ問題で、幼兒が他日發達すると否とは實にこれによりて別けらるゝのである、次ぎに保育上、教育上に於て最も大切なるは兒童の注意狀態である、若し注意作用の病的狀態について云はゞ種々なるをであるが普通の場合に於て注意作用の種類より幼兒を分つと二種とすることが出來る、今假りに其の一つを感動的兒童と他の一方をば活動的兒童と名づけておかう、感動的兒童とは注意の活き方が極めてのろく容易に他に移らぬ傾向がある、即ち注意の流れが一ッ所に停滯して容易に他に流れ去らぬので、かつすでに感動的兒童と名づくるが如く物事に感動しやすく、心の中に強き感動を起して居てもこれを外部に發表することが極

めて少ない、而し其代りに心の中に其感動の殘りゆくをはながくかつ強いのでつまり感動の繼續時間が長いのである所謂執念深き幼兒とは此の種に屬するものである。

これに反して活動的兒童は其の感動を比較的著しく發表するが感情の繼續時間短かく注意をむくるを早きも忽ちにして倦怠しやすい、從つて此種の兒童は注意が外方にうつりやすく今甲事にとりかゝると見るや忽ちにして乙事を營まんとするの傾向を有し、例へば唱歌の時間の如きもはじめ暫時は興味ありげに熱心にうたへど間もなく倦んで或はわるさをなし或は他兒に話しかくるなど注意は忽ち他に轉じて終始專心にうたひ終るををしない、斯の如く唯注意作用の一點のみよりいふも個性に著しき相異がある、斯の如く相異れる個性を有して居る數々の兒童をして各其長を長じ短を補ひ以て完全圓滿なる發達を遂けしめんをは保育上教育上切に我々の希望するところで斯くせんには精細なる個性の觀察を要するのである、

活動性の兒童は注意作用上よりいへば上述の如く許多の缺典を有せるも活氣ありて常に衆兒の間に於て牛耳を執るの位置に立ち、遊步運動の際の如き指導者たりやすく且指導者たらしむれば遊戯全般をして滯りなく巧みに終らしむるをが出來る、而し出來るからといひて常にこの種の兒童のみを指導者たらしむるときはこの個性はます〳〵一方に偏して到底圓滿なる發達を遂げしむるをが出來ぬ、教育上よりいへば此種の兒童は成べく注意をながく繼續せしめ沈着に事物を考ふるやう導かねばならぬのである。

感動性の兒童は注意が常に停滯しやすいから自然のまゝに任せおくときは一事にのみ執着熱中して廣く知識を求むるをせず、從つて知識界の狹隘なるものとなつて去まう、此種の兒童を矯正するにはなるべく注意を他に轉せしむるやう導くのである、且つ其の指導者たらしむるに不適當なる故を以て常に他兒の下に立たしむるときは其個性的缺典をしてます〳〵助長せしむるをになるから保育を以て各個人をして完全なる人たらしめんとするの目的ならしめば此種の兒童をして其性質に反して却りて指導者たらしむるを要するのである、遊嬉其他の保育事業をして單に巧を目的とする一種の技術たらしめ兒童に完全なる發達を餘所にするならばいざ知らず、兒童完全の發達を以て目的とする以上は常に其短を補はしめんをにつとめなければならないのである。

以上二種の個性に於て注意作用の上に著しい相違があるが、今小學校に於てこの二種の兒童に同時に文法を敎ふるに感動性の兒童は注意が一つ所に停滯するの傾きあるが故に、文法を敎ふるにも應用的のものを與へて自ら考へしむる方法を以てするよりは寧ろ注入的の方法をとり成るべく注意を他にうつらしむるやうにする、活動性の兒童はこれに反してなるべく自ら思考し自ら應用する等深く自ら考ふる法即ちなるべく活動的なる腦をつかふをの多かるべき方法を以て授くるを必要とするのである、斯個人〳〵につき敎師のとるべき態度を異にするの必要がある敎室に於て盛んに質問を發する兒童は多くは活動性の兒童であるが、これは思考に思考を重ねた結果として疑問を生じたるものではなく活動を好むといふ

性質より頻りに質問を試るのである、故に教師の答を充分に熟考してこれを他に應用するのは質問せし活動性の兒童にあらずして却りて默然として傍にこの問答をきゝつゝありし感動性の兒童であるをが多い、斯く個性に對しては種々なる研究を要するに現今未だ個性に應したる保育法教育法の缺けて居るのは其一大缺點といふてよろしい、注意作用に次いで注意すべきは指導者たらんを望む幼兒と服從を喜ぶ幼兒との取扱である、種々相異なる許多の幼兒を各別々に訓練せんとは極めて複雜な至りて困難な方法である、故に保育者は第一に幼兒中の指導者を見出しこれに自己の希望を吹き込んで以て他兒をしてこれに服從せしむるの簡便法をとるがよろしい、例へばさわぎたてる數多の幼兒を同時に靜肅ならしめんとは甚だ困難なをであるが其うちの指導者を呼び出し十分訓戒を與へて服從せしむるときは他は難なく平穩に歸する如き次第で社會に於ける種々の騷擾も其首領をさへ抑へ得れば他は自ら鎮まるものである。

第三、道德的性質上より個性を發見する法、　この方法に於て一二の希望をいはんに願くは訓育上に於て常に各兒童が如何なる方法にて責めたるときに最も強く感じたるかを洞察し、兒童によりて各適切なる賞罰法を行はれんをを望むのである、或兒童は言語を用ゐて戒めんよりは態度によりて戒めん方さゝめおほきものあり、これ耳に訴へられんよりは目に訴へらるゝ方効果あるものなり、これに反して或兒童は目に訴へられんよりは耳に訴へられし方強く感ずるものある等兒童によりて賞罰の方法を異にする

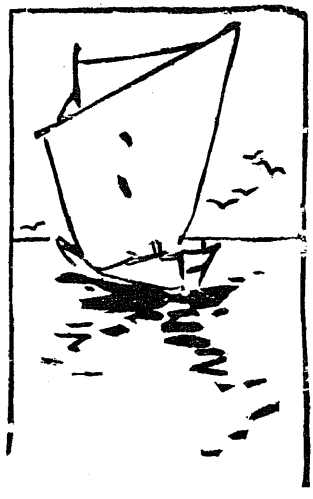
を要するのである、其他道德的性質に關しては微細の點につきて注意を與ふる必要がある。

第四、教育上より個性を觀察する法、この方法はいろ〳〵あるが今は唯著しく幼稚園に關係あるものゝみを擧げやう、幼兒の個性はまたよく遊嬉の際に觀察し得らるゝものである三才以前の正しき發達をなせる幼兒は物の變化をもて無上の愉快としこの性に適合せる遊びを最もおほくよろこぶものである、彼の「バア」といひつゝしば〳〵顏を物かげよりあらはす遊びの如きは大人より見れば何の興味もないをだが、幼兒には其ある時間を隔てて愛やさるゝといふ僅かの變化でさへ非常におもしろく感ずるのである、三才以上になると如何なる點に深き興味をもつかといふに自己の活力を用ゐてなす事、活動力を有するの自覺及び他より追はるゝを等をよろこぶが、これは本能的の嗜好で少年時代には凡て之をよろこぶ、つまり發達の一時期に於てあらはるゝ本能的の愉快である、是に次いで起す愉快は摸倣的愉快でなほこの外に競爭的愉快などもあるが幼稚園時代にありてこれを好むは早熟の子で普通の幼兒は未だこれを好むに至らないのが常である其次は物を攝成する愉快、集合する愉快美を感するによりて起す愉快等で、是等の愉快も幼兒によりて感ずる度合を異にして居るから從つてある兒は摸倣性が發達して居るとかある兒は創造力に富んで居るとかある兒は美的感情が養はれて居るとかいふように各兒の個性を觀察するをが出來るのである、

兒童については以上述べし如く身体上、精神上、道德的性質上、及教育上より充分確實に其個性を調

査し、以て各兒の短を補ひ長を進め以て完全圓滿なる品性を得しめんをを要するのである、概していへは今の保育法は個性研究の缺けて居るため幼兒の短所を補ふををなさず、却りて短所を助長せしめ個性的缺典をしていよ〳〵甚しからしむるの方法をとつて居るの觀があるから、今日この好機會を得たを幸、保姆諸君に對し個性の觀察及其取扱法の改良につき充分の研究あらせられんをを希望せし次第である、

右は四月二十一日、本會總會に於ける演說の大要を筆記せしものなり。



子供と間食

ひむかし

私共では子供に一切間食をさせないことに致して居ります。定りの食事は四時間おきにして、一日四度に決めて居りますが、させないときめれば、夫が習慣となつて、子供は別に欲がりもしませぬ。尤も、最初はやつて居りましたが、やり付けると、さあ夫が癖になつて、少し遊びに倦きてきますと、ぢき戸棚の所へ行つて、「うま〳〵」、といつて仕様がありませぬで、餘程前から、とう〳〵已めて仕舞ふことにしました。

一體、間食は大人でも、あまりよくはないことに決つて居りますが、夫が子供になると、世間では、「まあ子供だから」「可愛相だから」といふ風にしてやつて居ります。勿論丈夫な子供ですと、大した事も見えぬ樣ですが、夫でも、やはりやりつけない習慣の方が宜しいと思ひます。まして、少し弱い質の子供に取つては尙更のこと、思ひます。私共でも食事と食事との間に、何か輕いお菓子の樣なものをやる事にしようか、どうかと、餘程迷ひましたが、醫師の勸めもあり、かた〳〵廢することにしました。夫で只今の處では、お客などの時、菓子を出して食べて居ましても、別に欲しがりもしませぬ。只〻食事前三十分にもなると、そろ〳〵ねだり出して八釜しく言ひますが、夫でも外で遊ばして置けば、四時間は大丈夫、何も食べないでよく遊びます。而し、今は三つですが、これから先も、この習慣をつゝけたいと思つて居ます。

夫から子供の食事につきて、も一つ注意すべきことは皆で一所に食事する時に、子供にといつて決

つたものゝ他には、側からは何もやらないことです。そうしますと、子供は自分の分丈を食べて仕舞へば、決して他の人が何を食べようが、ねだることはありません

夫から間食させることゝして、私共の經驗やら、他から聞いた事に因りて見ますと、二歳位で、腸などのあまり丈夫でない子供によくないものは、第一、餡氣のものは無論行けません。夫から甘薯も行けません。かるやきは、お醫者はあまり惡くは言ひませぬが、これで失敗つた人は、隨分聞きました。ビスケット、園の露など、二歳未滿の子供には矢張り宜しくありませぬ、これはお醫者も言ひます。比較的一番安全に思はれるのは、ウエーフツースといふお菓子です。菓物は必らず下劑を起します。

貞一の日記（明治廿六年五月廿一日生男兒）（拔萃承前）

その母

四月七日　今日は、朝より、天氣も宜しき故、久し振にて、上野へ遊びに行き、歸途草履をはきて歩いて歸る。午後も、門外にて犬と、戯れて遊ぶ。

四時過き、急に元氣なくなり、ウン〳〵ジャイ（痛イ）など云ふ、母に抱かれてばかり居りしが、二回吐す。食後二時間も、經過せし事なればか、水樣のもの許りなりき、夜に入りて佐々木先生を迎ふ。（小原先生の代診）熱は七度八分なり、今の所にてはインフルエンザの樣なり、然し當時麻疹流行し居れば、油斷はならず、どうか、それにならぬ樣したき者なり、今の健ならぬ身体に、麻疹にならば、他の恐ろしき余病

など引き起す憂あればと、いたく心配せらるゝ樣子なりき。

便通二回　一回は軟便。

四月八日　元氣なし。但し食氣は變らず

熱　朝（卅九度九分）　夕　仝前。

軟便一回。

四月九日　咳少し出づ然し元氣は宜しくなりたり夜余り熱高き故、復た佐々木先生を迎ふ。胸を冷濕布にてまく、凡そ三時間毎に取り代へるべしとのことなり。

熱　卅九度八分

軟便　二回

食事　粥を平常より薄くなし、魚肉も三分一となす。

四月十日　熱　午前八時（卅六度八分）午後二時（卅七度）夜九時（卅八度六分）

軟便　三回。

咳の出ること、漸く增したれば、本日より吸入を始むること丶せり。

四月十一日　顏に赤き發疹を見る。但し例に由り食氣變らず、咳は昨日より多し、元氣なく、朝より床に臥す、佐々木先生來診いよ〳〵はしかならんと

熱　朝（卅六度）晝（卅七度七分）夜（卅九度六分）

便通　三回。

四月十二日　發疹おひ〳〵胸背などにも一面に出來る

熱　朝（卅七度五分）　晝（卅九度九分）　夕（卅九度五分）

呼吸　午後七時　四十四

黒色軟便　三回。
吸入六回
小原先生來診せらる
母は本日より學校を休む。
四月十三日　顔も身体も、一面に、發疹す。咳烈しく出づ。今日は峠ならんと、醫師は云はる、羞明烈しき爲眼は閉ぢたる儘にて、少しも開かず、見えぬながらも、パンをもらふ時は、例の如く、兩手を重ねて、頂戴をなす、
今夜より、母は宵の中眠りて、安田さん其間、附添ひ火鉢に炭をつぎ、寒暖計とにらみあひして、室の温度を凡そ六十四五度に保つことに注意す、母は夜半より起きて安田さんと代る、
食慾は變らず、ミルクトーストのパンを少し殘す、のどむつがゆき爲ならん、

熱　午前六時(卅九度)午後二時(卅八度七分)午後八時(卅九度)
呼吸　午後八時　卅五。
便通　三回　下痢
吸入　七回
佐々木先生　三回來診
四月十四日　終日終夜、ウツラ〳〵と眠る、覺めたる時も、眼をひらかず、
食慾は變らず、ミルクトーストのパンを殘す、
ジャム付の方は、滯りなく食す、
熱　午前六時(卅九度八分)九時(卅八度七分)二時(卅七度六分)三時四十分(卅九度一分)七時十五分(卅八度二分)十時卅分(卅七度七分)
吸入六回
黒色便一回。

小原先生　來診せらる

四月十五日　今日は眼を開く、起きたがつては、やかましく泣く、ミルクトーストにせず、牛乳は牛乳ばかり、パンはジャム附けたの許りを與ふ、

熱　午前二時（卅八度四分）五時半（卅七度三分）八時半（卅六度九分）午後二時（卅八度七分）八時（卅七度一分）

疹の色少し黑くなる。

佐々木先生來診。

四月十六日　今日は疹余程引きたり、機嫌もよく、佐々木先生來診の折　時計を持ちて、脈を計り居れば、自分も、枕許に在りし、母の時計をもちてながめ、後に佐々木先生に、是にて見よとの樣に渡す、先生鏡の樣なもの取り出して、顏

を照して見たまへば、アオなど云ひて、指をさし、エン〳〵ゴー〳〵（エン〳〵は外、ゴー〳〵は電車）なといふ、夜はよく睡る。

熱　午前八時（卅六度五分）午後二時（卅六度）午後八時（卅六度三分）

吸入七回

便通　一回　黑色にして形あり多量。

四月十七日　疹は全く色さめて、黑がゝりたり、小原先生來診　牛乳は追々に增して、一日五〇〇瓦まで飲ませる樣にとの事なり。朝食の時二〇〇瓦、晝食の時五〇瓦、おやつの時二〇〇瓦夕食の時五〇瓦といふ割合なり、

午後より咳少し多くなる。

熱　朝（卅度一分）晝（廿六度五分）夕（卅六度七分）

吸入八回

食事　夕食の牛乳を一〇〇瓦とす、

黒色便一回

四月十八日　朝牛乳を二〇〇瓦、與へんとせしもイヤ〳〵といひて飲まぬ故、余り一度に強いて、はゝと思ひ一五〇瓦とす、

朝　牛乳一五〇瓦　パン二切（ジャム付）

晝　粥一椀　魚四匁　牛乳五〇瓦

おやつ　牛乳一〇〇瓦　パン三切（ジャム付）

夕　晝に仝じ

（但しパンは半斤を二日に食す、まわりのかたき所をのぞきて）

昨日小原先生來診の時、今日の分にて、容体に變りなくば、明日は來診せずと云はれしも、午後に至り熱また高くなりし故、復た佐々木先生を迎ふ、別に心配する程の事はなしと、

熱　七時半（卅六度九分）二時（卅七度六分）五時（卅六度九分）

吸入九回

通便一回

四月十九日　咳余程少くなる、

熱　午前七時半　卅六度四分）午後一時半（卅六度）六時半（六度一分）

吸入七回

便通一回

四月廿日　咳追々宜し

熱　朝（卅六度三分）二時半（卅六度三分）

夕（卅六度一分

吸入六回

便通一回。

四月廿一日　咳も殆となくなる。

熱　午前七時半(卅六度七分)午後二時(卅六度六分)午後八時(卅六度一分)

牛乳　一五〇瓦(朝)五〇(晝)一五〇瓦(おやつ)五〇瓦(夕)

魚肉は平生に復し、八匁づゝ(一回に)

便通一回

四月廿二日　熱もなく、他に異常なし

母今日より學校に行く

四月廿三日　本夜より母と安田氏の徹夜看護をやめ父母と同室に眠る井上牧師來訪、カードを下さる、これは繪といひしに、エヽヽと幾度もいふ。

麻疹の豫後は餘程注意せざれば他に併發症を伴ふべしとの事なり。凡そ潛伏期一週間、發疹期一週間、而して豫後一週間は就褥せしむべきまりなりと承はりぬ。發病の時より既に十七日を經過したり。此分にて行かば豫後も良好ならむとの事なり。

婦人と親族法（承前）

太田英隆

第二款　親系及び親等

(一)。親系とは、血族や姻族が相互に連らなつて居る血統で、二つの區別があります。

(1)　直系及び傍系

直系とは、自分又は配偶者から上下に連らなる關係で、父母、祖父母、曾祖父母、高祖父母、子、孫、曾孫、玄孫の如きであります。之れに反して、同一始祖から分岐せる關係、即ち伯叔

父、姑の如きを傍系と云ふのです。この區別は、實際上實益があるのです。

(2)

尊屬及び卑屬

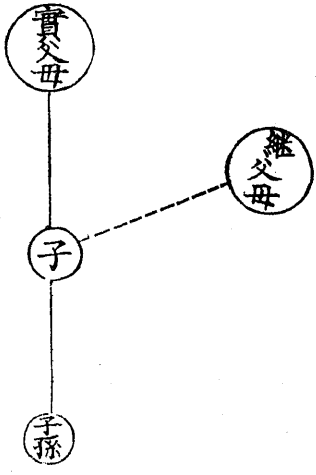
尊屬とは、自分より系統が上位にある、父母、祖父母の如きものを云ひます。卑族とは系統上自分の下位にある、子、孫、曾孫、甥、姪等の類であります。この實益は相續順位に大に關係します。

(二)親等とは、系統上親族關係の遠近を示す名目であつて、即ち親族間に於ける世代であります。其親等の算定法は民法第七百二十六條に定めてありますから、これを少しく説明しませう。

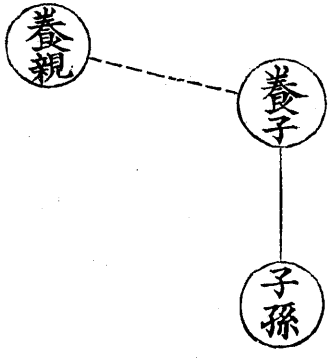
親等を定めるに二種あります。一は尊卑の階級です。例へば、配偶者相互にては婦の夫に對する關係は一親等で、夫の婦に對する關係は二親等であります。二は、血統の親疎遠近を示すものです。即ち親族の遠近は世數を算して之を定め、一世を以て一親等とするやうなで、吾法に用ひてゐる羅馬主義です。それで、親子の間は一世ですから一等親でありますが、祖父母は二等親になります。兄弟は父まで溯りて其間の世數一親等と、父より兄弟に下る其間の世數一親等を加へますから、自分の二親等の傍系親となります。

以上説いた所を明かにする爲め、左に親族の圖解を掲げますから、之れに就いて見て下さい。

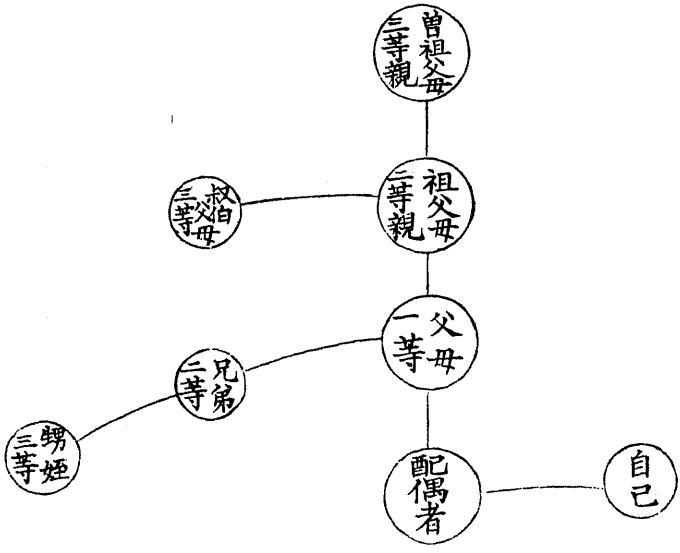
繼親子親族關係圖



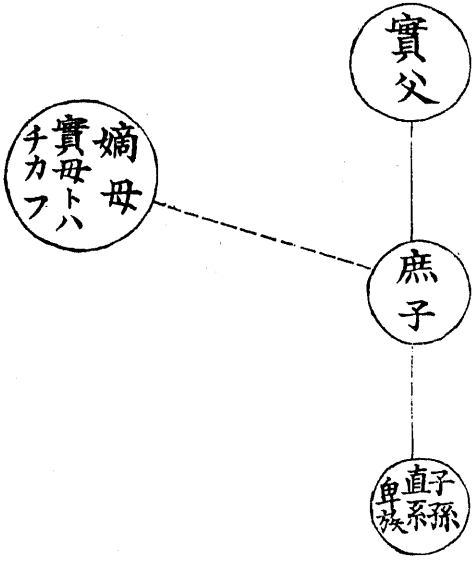
養親子親族關係圖



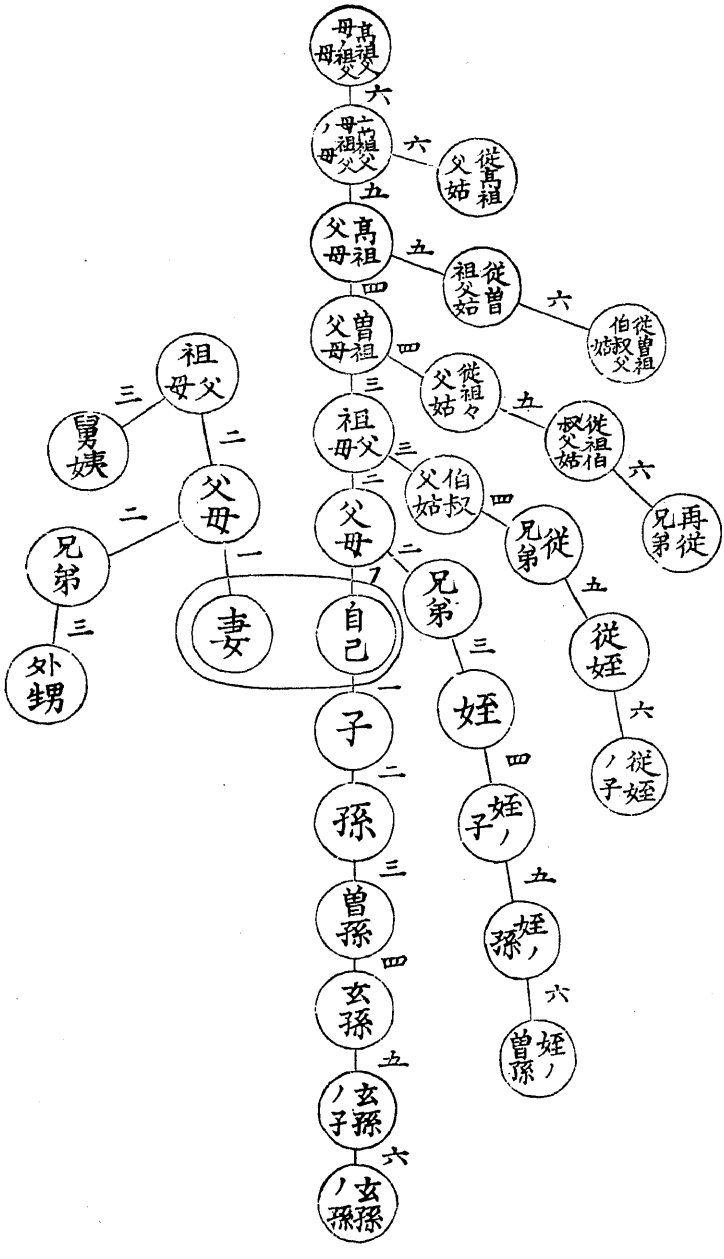
姻族親等圖



嫡母庶子親族關係圖



親等圖


高祖父母ノ母
六
高祖父母ノ母
六
從高祖父姑
五
高祖父母
五
從曾祖父姑
六
從曾祖父叔姑
四
曾祖父母
四
從祖父姑
五
從祖父叔姑
六
再從兄弟
三
祖父母
三
伯父叔姑
四
從兄弟
五
從姪
六
從姪ノ子
二
祖父母
二
父母
二
兄弟
三
外甥
一
妻
一
自己
二
兄弟
三
姪
四
姪ノ子
五
姪ノ孫
六
姪ノ曾孫
一
子
二
孫
三
曾孫
四
玄孫
五
玄孫ノ子
六
玄孫ノ孫

第三節　親族關係の消滅

所謂血族關係は、如何なる場合でも消滅せしむることはありませんが、準血族關係は、左の原因によつて消滅します。

（一）離婚。（二）離緣（養子の場合）。（三）配偶者、養親養子と共に配偶者及直系卑屬、等が家を去りたる時。

親族關係の消滅は、別に説明するに及びませんから省略して、第一章は之れで終へ、次から第二章に移ります。

割烹

石井泰次郎

筍料理

筍中半分

豆腐　小二ッ（百匁）
醬粟　一合
砂糖　三十匁
生酢　一合
醬油　二勺
醬油　五勺
砂糖　三十匁内

筍の根の方を切て、皮の上より皮だけ堅に二つに切かけて、皮をむきさりて、根の方のいぼ〳〵した所を庖丁刀にてむきとり、湯鍋に入れて湯煮一時間して、取出し、水にひたしおきて、後に三分位のあつさに輪切に切て、醬油と砂糖と水とを合せたる汁にて、下煮をして、さて汁をしたみて、白酢の中へ入れてあへて出すべし、白酢の拵方は左の如し。

とうふを、布に包みてしぼりて、砂糖と酢と醬油とけしを（けしは焙煎にて炊て擂盆にてすりたるものを）合せて能くすりまぜてつくるなり。

○この拵方の中の酢をつかはぬ時は、たゞの白和となるなり。

同

筍　中半分

黒胡麻　一合

甘味噌　三十匁

砂糖　四本　二十匁内

味淋酒　白　三勺

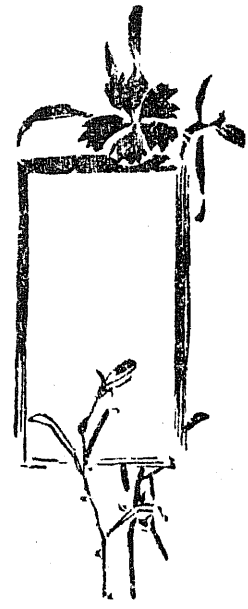
水　一合内

筍を湯煮して（此時たてに切てから煮てよし）取上て水にひたしてあげて、三分わつに切り、又それを二つに切て、青串を平たく削りたる田樂につかふ串に、二つ三つをさして、あぶりて、すぐに刷毛にて煉たる味噌をぬりて、火よりおろして、皿、又は田樂のはこに並べ入れて出すべし、木の芽をそへてよし。

○味噌は、擂盆にてすりて、馬尾篩にて裏漉にして鍋に入れ、砂糖を入れ、みりんを入れ、くつしこかして火にかけ、ごま（いりてすりたる）を加へ、よくまぜ、水を加へてよく煉りてつくるなり。

◎右のほか田夫煮とて、ほそく長く線に切て、砂糖と味淋とを合せて煮立たる鍋の中に、少しつゝそろへて入れて煮て、色のかはる時を度として、皿へとりあげて、盛分て出す事あり

◎又田樂もいろ〳〵考へて取仕くみてつくり試



孤燈獨語錄

獨語子

▲過ぎし月の日曜に、日比谷の公園に遊んだ。四通八達の公園内の道路の、丸で人で織る樣な中を通り抜けて芝生の處まで來ると、さながら青毛氈を敷きつめた樣な春の野邊、入口には「下駄足駄にて入るべからず」との高札がある。這入つて見ると此處も蒸す樣な人數、多くの婦人達は皆下駄を手にして歩いて居る、ステッキに鼻緒を通して荷ひ歩く書生もある、と見て居ると、八字の鬚の紳士ともつかず、書生ともつかぬ男の、男の子を引きつれたのが、つか〳〵と下駄の儘大手を振つて通りかゝつた、すると、目を八方に配つて居つた番人は、いきなり「申し〳〵下駄の儘ではいけませぬ」と叫んだ、男は馬耳東風の樣をよそうて行き過ぎる、「あなた分りませぬか」追つかけさまに番人が迫る、尙無言の儘、急ぎ足に行くを、此方は前に立ち塞がつて「分らないのですか」と繰り返すや否や、彼の男「分らないわッ」と一言、鐵拳を振つて衝き退けながら、づん〳〵通り抜け樣として居た、如何に結局せしか其後は知らねど、戰勝國の公德は、もつと高かるべき筈と感じたるもの、果た獨語子一人のみではなかつたらう。

▲同じ日、同じ場所にて四歳位とも思はれる男の子の、身形も卑しくなさ相なのが、父に離れたの

か、母にはぐれたのか。群集の中を、聲を限りに泣きながら、右に左に漂歩いて居る、例令ば親を失つた雛鳥の樣にもある。女子供が集つてくる、餘計に泣き出す。誰と來たの？と尋ねても無論分らず、みな〳〵途方にくれて何ともし樣なくて居る中、番人が來て連れて行つた、多分は交番へ。子供をつれて遊びに來なから、自分の興に浮かれでか、あらぬか、兎に角可愛き者を人込の中にはぐれさせるとは、さてもさま〳〵の世の親心とは、誰しも思ひ浮んだであらふ。

▲東京の女學生に情死せしものあり、京都の女學生に駈落せしものあり、社會はこの罪を教育者のみに責め樣とするが、人を教育する力は學校と社會と家庭との三つの中、何れが果して一番強いか知れない、否な少くとも青年時代に於ける、社會の感化の力が非常なのは事實の樣だ、して見ると、此の如き學生を出した社會がこれに向つて、眞先に責を負ふべきである。

▲我同胞幾多の將卒が、陸に海に肉を劈き血を流しつゝある間に、東都の劇場は相競うて、今樣劇を催うし、觀客に男友學生最も多いとは、何といふ現象であらう。まさか、學校が此現象を教育し出したのだともいはれまい。

▲可笑しいのは、雜誌記者の處へ、自分の家の收入を報知して、自家の會計を立てゝ貰ふ人の心である。立てる方では机の上の空論だから、どんなに家族が多くつて收入少くとも、如何樣にも立て得ることが出來る、が、空論から割り出した此會計法が果して實地に間に合ふであらふか、現在局に當つて居る家の主婦ですら出來ない會計が、何

て五十里百里隔たつた東京の人の手に出來ようか更に又自分の家の暮し向きをあかの他人に立てゝ貰はねばならぬといふは、何といふ意氣地のない主婦であらうか、とは平生から考へて居た所だが近頃の六合雜誌にも同じ樣な意味の論說が見えた

▲收入の十分の一乃至八分の一を以て家賃に當てよといふ原則は、少くとも今日の東京に於ては出來ぬ相談である。五十圓の收入の人の捜むべき、五圓乃至六圓の家は金の跡で尋ねても見當るものでない。敢て家主の肩を持つのでないが、今日の家政を考へる人は家賃に向つて餘り制限し過ぎるでないか、十五圓とか二十圓とか纏めて出すから多すぎる樣に思ふのだが、家族の一人前に分つて見ると大低は月に二三圓に當る、夫で以て雨露を凌ぎ、疲を醫し、樂しき家庭を造つて行かれることを思へば、家賃をたゞ捨てる樣に思ふのは間違つて居る、家賃は食費と同じ位に出しても宜からうと思ふ。

▲別して女の「ハイ」yesといふ言葉には裏がある心では隨分「否」Noであつても、大低までは「ハイ」といつて仕舞ふ。殊に目上に向ては、よく〳〵の場合でなくては「否」noとは言ひ得ぬものである。故に婦人を職員として使ふ人は、たゞ「ハイ」yesといつたからとて、自分の意見が心から贊成せられたものと思つて、どし〳〵實行しては、隨分酷なことにもなるものである。

愚感一束

相州國分寺の傍　平岩繁治

▲品川より見送りの人に別れて瀛車の中に飛び込

めば、中に一人の氣高き老婆と、一人の少年とがあり。余はこの二人に對して座に就いた、瀘車の進行と共に窓の景色は漸々と打ち變り、見渡す限り田畝の間には、すみれや、たんぽゝ或は菜の花に蝶の舞う、そか中に幼子までもうち交りて舞ひ遊び居る、さながら廻り燈籠を見て居る樣である。其の間先の少年は老婆に向つて、すみれや、たんぽゝの説明に餘念もなかつたがフト「お祖母さんあれは何でしよー」と、老婆答て彼れは「苗代よ、あれから毎日食べるお米が採れるのよ」と懇ろに説明した、少年は一々分つた樣な顏付で面白く聞いて居た。

▲或る家の幼兒、他所に使に行くと先方では、駄賃を呉れるので此の幼兒、使許りは大得意の所、或日使に行つた時、何も駄賃が貰えぬので大失望、其れからと云ふ者は、如何なる事あるも其の家には使に行かぬ樣になつた。駄賃のために子供を働かせるとこんなことになる。

▲戰地より母に寄せたる手紙の中に、今度の戰いでは少し左の股に傷を受けたとあつたのを聞いて、或る婦人が、其れを評していふに、「左とは氣が利かぬ、左翼とか右翼とか云うてよこせばよいのに」と又某教師の妻君或る話の折り長女のことを長男と云うて平氣でおつた、「ナマカジリ」の漢語つかいにも困つた者である。

▲老翁余に語りて曰ふ、先生實に不思議ですねー、竹の笹までもこんなに戰爭を心配して居ます、そら御覽なさいと示したのである、よく見ると成程不思義であつた、男竹の葉に皆銃の形が一つから三つまで出來て居るのである、老翁の話

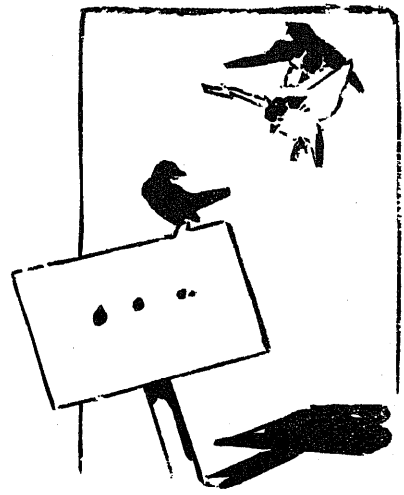
に依ると六十年以來斯る事は一度もない故に戰爭は必ず日本の大勝利です、植物までもこんなに心配して居るのであるから、國民たる者は尙一層奮發すべきであると話されたのである。

▲又同じ老翁曰く昔から櫻の花は大抵一瓣〳〵になつて散るのが普通であるのに、今年はご覽なさいあの通り大輪のまゝ落ちて居ます、これも一つの不思議です。多分戰勝の前兆であろーと話されたのである。

▲戰勝の喜びは、都も田舍も同じでありますが、田舍の多くの婦人こそ氣の毒の次第である、此の度の戰爭は何のために日本は露國と戰つて居るのか、如何なる原因に依りて戰爭は起りしか、さつぱりわからないで只無暗に喜び只心配して居るのである、此れを以て見るも今日の女子教育の如何なる所まで進んで居るかが分るのである。

▲毎年五月の節句には相模（特に相模川の中流にて）では小なるは半紙一枚から大なるは八九間四方以上の「たこ」を作りて男兒が爭て空中高く揚げるのが例でありますが、昨年も今年も即ち戰爭がはじまつてからと云ふものは少さいのが、彼方に一つ此方に二つと云う風で、空を眺めても甚だ淋しいのである、いつもなら空が見えぬまでに澤山揚がつて、夜中になつても其れは〳〵ぐん〳〵ぐわん〳〵「ウナリ」が鳴り響きて誠に賑やかで勇ましくありますが、今年は夢にも見る事は出來ぬのである、時局の影響でもありませうか。

（五月七日記す）



フレーベル會俳句端書集

一、課題　當季雜吟一人十句以下
一、締切　六月二十五日限り
一、披露　明治三十八年八月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には美景を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし、

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野寄零宛

第十一回俳句端書集

大名もしのび姿や初ざくら　東京　藤並ゆかり
爪音は誰がつれ〳〵や花の雨　同
山燒て麓にせまる暮雲かな　同
梨花白し葛飾の里黃昏るゝ　同
葉櫻や誰が折敷し釣の跡　仙臺　立花一瓢
葉櫻や寂たる寺の寄進札　同
銅像の眉に積りぬ花吹雪　同

麗やはるかに拜す畝傍山 大分町 吉田 春月
俳を說く孤燈の下や啼く蛙 同
城跡や古木の櫻尙ほ朽ちず 同
夜櫻や高き廊下にさゞめごと 長野市 飯塚 曉霞
舟唄の遠く聞えて夕かすみ 同
春の川椿流れて暮れにけり 陸奥 須藤美佐子
摘草や英吉利の子も交りたる 同
朝風の庭一面や落椿 同
戀草の捨てゝもあるや惜む春 同
人去りて一人語りぬ散るさくら 埼玉 帶津 帶水
櫻がり祝捷會の池の端 同
蓮華花葦も咲けり方十歩 武藏 大野白醉樓
霞漠々末は櫻に連らなりぬ 同
窓外に春の散り行く花一株 同
山笑ひ人も笑ひて鳥の啼く 同

朝風に心浮立つ櫻かな 東京 吉村 白鷹
花の下醉ふて瓢を枕かな 同
雉子啼くや裾から晴るゝ山の雨 武田 清窓
忠魂の眠れる塚や散る櫻 同
山鳩の雲を呼び出す若葉かな 豐前 金子 琴月
葉櫻や昔思へは耻かしき 同
濡色に山の明け行く四月かな 上總 高橋 波月
蛇穴を出たり草家の曲り道 同
鳥の巢の古さを見るや木の芽摘 同
小式部の返歌ありけり春の宵 栃木 櫻川 閑山
雨の蛙律師が宿の連歌かな 上野 加藤よし子
垣破れて山吹の伏す小溝かな 同
有明のうす紫や杜若 同
葉櫻や金網かけし常夜燈 常陸 落花庵
鶯の老て久しき五月かな 月田 一市

葉櫻に鳥居かくるゝ社かな　同

椽先や鶯老て人眠る　同

天位にはまだ及びがたきを嘆きて、天迄はまだ遙かなり啼く雲雀　川越　山田だるま

人位の入賞をうけて、人並に我もあとから花見かな　同

三　光

天　花に月間もなく雨のぽつり〳〵　吉村　白鷹

評曰、社會の事々物々凡べてのこの十七文字中にあり、

地　ピヤノ聞く上野の奥や若葉蔭　須藤美佐子

人　武德殿に弓の稽古や朝ざくら　吉田　春月

一日一詠　無一庵奇零

五月一日、軍國の苗代

痩馬に小さき男や苗代田

五月二日　睦ましく子女の群遊ふを見て

まゝ事の莚ひきけり若葉かげ

五月三日、戰地より友の便りありすぐ返事を認む

待つ君を思へば親し惜む春

五月四日、靖國神社臨時大祭

拜殿の櫻若葉や血の涙

五月五日、花屋の老爺より杜若を買ふ

山吹は早や末にして杜若

五月六日、又も南風はげし

行春や日毎うるさき風の向き

五月七日、川越大宮間の電鐵工事始まる

レールひく鐵道隊や日の永き

五月八日　教授界第三週年の祝吟をおくる

今開く牡丹美くし花三つ

五月九日、あはてゝ辨當をさげ出す

宵に聞く蛙に朝寐〳〵かな

薩摩守忠度

林天然

満れば缺くる理を
悟らで迷ふぞ浮世なる
月にあこがれ花に醉ひ
この世を我世と安らけく
榮華に誇りし一門も
運命こゝに盡きぬれば
なれし都を後に見て
西國さして落ちにけり
忠度卿はたゞ一人
狐川より引き還えし
人目を忍ぶ風情にて
五條の三位訪ひつ
若しも世亂の鎮りて
勅撰あらん其折りは
斯道の情義希くは
拙き詠歌も召しませと
鎧の下より取り出だす
調もやさしき歌百首
はるけき八重の汐路なる
千尋の底に沈むとも
ねかひ聞き入れ玉はらば
思ひ置くこと露なしと
再ひ向ふ西の空
指し行く先は朧なり
見よや天翔く蛟龍も
落つれば儒蚯となるぞかし
あはれ時めく英雄が
野邊に山邊に行き暮れて

木の下かげを宿として
　花や今宵の主ぞと
うたふ心は優さしくも
　今宵一夜の宿からん
よすがは絶えて白波や
　御影大石打過ぎて
猶も進めば一の谷
　孤城落日支ふ間も
鵯越の夜あらしに
　頼むこゝろもあだ櫻
惜しや明日をも待ちあえず
　花の姿はちりにけり
花の姿はちりぬれど
　ちとせもゝとせ後の世の
文讀む人のためにとて
殘せる形見の一枝は
千載集にとゞまりぬ
千載集にとゞまりぬ

保育者のため

幼稚園に於ける自然研究（二）

平山ひさ

▼凡ての動物は幼兒に對して親しい友達であるので、大人が見てさほどにない物でも幼兒は愛らしとして近づくものである。それに大人は時として幼兒が喜んで友として居る動物を勝手に嫌つて、折角動物を愛する心情の萠芽を幼兒から拔き去る事が多い。尤も毒のある虫を恐れさせるのは賢い事なので、其時には、そういふ虫は戸外に置く方

がよい、其虫は戸外に居る方が幸なのである、戸外で容易く見る方が安全でよい、など、静かに教へてやるがよろしい。併し無害の動物を幼児が持つて來た時に大人が理由もなくいやがつたり、甚しいのは幼児の目前でそれを殺してしまふなどは決してしてならぬ事である。

▼幼児は動物を愛する樣に、木の葉とか草花とか凡て植物に對して興味を有つものである。そうして段々進んで其植物を發達させる内部の力を知るやうになつて來る、それ故に幼児が地に種子を蒔いて其生育に由て自然の力を認めるのは誠に有益な事である。

▼自然といふ點から考へると、幼児は田舍で育つ方が幸福である。町の幼児を田舍へ連れて行つて其喜んで活動する樣を見ると、都に居る時には何をして居つたかと氣の毒に思はれる。田舍では周圍に自然が滿ちて居るから、幼児にとつて都合がよろしい。併し之に向つて導を與へねば何にもならぬので、萬物に向つて幼児の目や耳を開く樣に導いてやる事が必要である。

▼幼児のいろ〳〵の作業の一として植物の世話をさせるのは良い事であるといふ事は、今日では疑のない事になつて居るので、フレーベル氏も己に之を良しとして、方々の幼稚園の児等が地面の一小部分を有つて自分で堀り自分で耕し自分で種子を蒔いて之を培養する樣にしたい。保姆の指導の下に絶えず植物の世話をさせたい。と言はれて居る。其植物はなるべく生長しやすい培ひやすい殖やしやすい物がよいので、容易に葉や花ができて大きくなる普通のものがよろしい

▼そうすると幼兒は之に由て植物生育の自然の微妙な力を知らず〳〵に悟り、只口では敎へられぬ訓を無言の間に受ける事になる。そうして保姆と幼兒の協力の結果、其處にできた花はかざりに、野菜は食用に、豆は豆細工に、種子は翌年の爲にといふ風に、實用に供する事ができる。

▼幼兒の一人々々に少しばかりの土地を與へるといふ事は、都會の狹い幼稚園では、到底望み得られぬとしても、何か保姆が工夫をして、幼兒に向つて植物が芽を出す、大きくなるといふ次第を見せたいものである。たとへば箱庭樣のものを作り、たとひ少しでも其中に何か植ゑるとも、又は植木鉢を日あたりのよい窓の處に置かうとも、又は只水中にさへ置けばよい植物を瓶で養はうとも、何かそこに方法がありそうなもので、之に由りて幼兒は水をやるとか日光を十分に與ふるとか樂んで植物の爲に善をなす事ができる。自分の幼稚園は狹いから大きな森を園内に作る事ができぬといふ理由で最も小なる種子を蒔く位の事もせぬといふ筈はない。

井上博士の幼稚園談

文學博士井上圓了氏は先頃雜誌「日本の小學敎師」に「敎育事業及慈善事業を論じて幼稚園のことに及ぶ」といふ題で一文を載せられた。吾人は博士の如き知名の人が漸く幼稚園事業に着目するに至つた機運の來たのを喜ぶ。博士は既に自ら園主となりて昨月より幼稚園を開設せられた。恐らく今後は同博士の意見を屢々聞くことも出來よう。今左に博士の論文を轉載する。尤

も博士の文中、「附屬幼稚園は設備を始め諸事皆亞米利加風に倣つて居るから、之は亞米利加的幼稚園だといはねばならぬ、全國の幼稚園も皆範を此に取つて居るから、皆亞米利加的で、從つて日本には亞米利加的幼稚園の他には日本的幼稚園といふものがない」といふ樣な意味の文があるが、これはどういふことを意味せられて居るのか、分りかねる、又「幼稚園の保育が家庭と一致しない非難」といふことも吾人の考へて居る所と同じであるかどうかは分らない、何れ時を得て博士の說を伺ふことも出來ようと思ふ、

我邦に於て、近來一年毎に敎育事業大に興り、慈善事業も亦漸く隆んなるに至れるも、目下尙ほ缺乏を感するものは左の三園なり。

一、乳兒園　二、幼稚園　三、養老園

乳兒園は貧民の乳兒を乳養する處にして、英國龍動の如き貧民多き場處には、殊に此組織の完備せるものを見る。其方法は貧民が乳兒の爲めに夫婦共に出で、勞働に就く事能はざる場合に、每朝家を出づるに當り、其乳兒を乳兒園に携へ行き、之に乳養を托し自ら出で、勞働に就き、夕刻再び乳兒園に行き乳兒を受取りて家に歸る。かくする時は、一家の夫婦共に每日家を閉ぢて勞働に從事するを得るなり。而して乳兒園には數名の乳母と子守あり、乳兒を養ふべき食品を備へ、乳兒を遊ばすべき遊具を設け　建築といひ居室と云ひ、庭園と云ひ、其壯麗なること貧民の住家とは雲泥も啻ならざる相違あり。斯る場處にて乳養せらるゝは獨り其父母の爲めに益する所あるのみならず、其

乳兒の爲めに大なる幸福と云ふべし。而して其設立も、維持も、共に慈善事業に屬するものなれば、終日乳兒を托するも其乳養料は僅に銅貨一枚に過ぎず、安價も亦甚し、かく僅に銅貨一枚を費して夫婦共に出でゝ日給を取るを得るに至るは實に貧民の幸福と曰はざるべからず。

次に幼稚園は、我國に於て既に其設備あるも今日一般に之に重きを置かざる風あるは教育上の一大缺點にして今より大に講究せざるを得ず、隨て慈善的幼稚園に至りては其數甚だ尠なし、故に今后は幼稚園の普及發達を圖るの必要あり其方法は別に述ぶる所あるべし。

次に養老園は老ひて賴るべき子供もなく、親戚もなきものを一處に集めて休養せしむるものにして其組織は米國に於て專ら行はるゝなり、之に無財

産の老人を慈惠によりて養ふものと、有財産の老人を一定の養料を徵集して寄宿せしむるものとの二樣あり、其慈惠に屬する方は貧院の一部にして東京市の養育院に見る所なり。唯其組織の全國に普及せざるは遺憾とする所なり。次に財産あるものを養ふ方法は我邦の如き家族制の組織を有し、親子同居の國風を存する今日にありては未だ米國の如き必要を認めざるなり。

西洋にありては、以上の三園の如き、イツレモ其多くは宗教の關係より成り、或は教會の事業に屬し、隨て宗教道德の修養をなさしむ。もし其の宗教を耶蘇教に限り、或は耶蘇教中の一宗一派に限ると云ふに至りては、信仰の自由を妨げ、思想の偏見を免れずと雖も、道德修養の一手段として之を觀るときは德育普及の方法は至れり盡くせりと

云ふて可なり、蓋し西洋に日新の學術隆盛を極むる中にありて、耶蘇教が深く人心に入りてよく信仰を固結し容易に動かすべからざる風あるは、全く慈善事業と教育事業とを占有するに由る。又社會一般の道德の比較的に進み居り公德の發達殊に著しきは道德修養の方法其宜しきを得るによる就中幼稚の時より宗教道德を注入せるにより。即ち乳兒園幼稚園等に宗教的機式裝置を設けて自然に修養するによるなり、我邦にありても、加能越三國の如き眞宗の流行せる地方にありては、家庭にて父母が朝夕幼兒に宗教を注入し、其感化の効力の觀るべきものあり、余之を觀る毎に、道德教育は幼稚の時より始めざるべからざるを知る。教育の要は、智育德育躰育の三者の外に出でざるべし。而して智育は學校教育に讓るべきも、德育躰育の二者は固より家庭の任する所なり。家庭にて之を實行し難き事情ありとすれば、家庭の代用に當る所の幼稚園に於て實行せざるべからず、此に於て幼稚園の事を論ずるは無用の言にあらざるを知るべし。

我邦の幼稚園は東京大坂京都を始めとし、各地の都會には多く其の設置あるも完全せるものは至りて尠なし。若し其の由來を尋るに、東京御茶の水女子高等師範學校附屬幼稚園が本邦幼稚園の元祖にして亦最も完備せるものなり。而して其設備はすべて亞米利加の幼稚園を學び諸事みな亞米利加風に倣へりと聞けり。果して然らば其幼稚園は亞米利加的幼稚園と謂はざるべからず。然るに全國の幼稚園は其模範を此御茶の水幼稚園に取りたる事明らかなれば、我邦には亞米利加的幼稚園あり

て、日本的幼稚園なしと云ふて可なり。先年幼稚園を創設せしより多少改變する所ありしにもせよ其亞米利加的根抵は今日尚ほ存するをは疑なかるべし。故を以て幼稚園の保育が家庭と一致せざる點に於て非難の聲あるを聞く、若し今後日本的幼稚園を設けんと欲せば西洋の模寫にあらずして日本の家庭よりあみ出したる幼稚園を作らざるべからず、然るに今日未だかゝる幼稚園なきは我邦幼稚園の未發達を證するに足る。

幼稚園の保育は學校風よりも家庭風にするを要す然るに動もすれば、學校風に流るゝ傾きあるは、幼稚園一般の弊にして、我邦の幼稚園は殊に其の弊あるを見る。其教師たる保姆も幼兒の母たる念よりも、學校の教師たる考を有し、躰育德育よりも寧ろ智育を進めんとする傾向あり。又保姆其人を見るに多くは保姆を以て滿足する人にあらずして、他日小學校の教師若しくは小學以上の教師たらんをを望むものなり。是れ今日保姆の位置も卑く待遇も薄く一般に輕視せらるゝの結果にあらざるなきも、亦日本人の通性として志望の高きによる點なきにあらず。且つ今日の保姆は其年齡も經驗も、未だ幼兒の母たる點に達せざるもの多きが如し、故に自然の勢家庭風よりも、學校風に流るゝ傾きあるは免れ難き所なり。去れば今より其弊を矯正する方法を講ぜざるべからず、

又、現今の幼稚園の保育法を觀るに、幼兒に相當せる智育躰育の法のみありて、德育の力は缺けるが如く感ぜらるゝなり。之れ其方法の智育躰育よりも困難なるに起因するも亦其方法を度外に置きて講究せざるによるが如し。既に我邦の幼稚園は

其模範を西洋に取りながら彼國の德育の方は宗教に關聯せるを以て之を除きたるの結果自然に德育の方面を缺くに至れり。若し西洋の德育は餘り宗教的にして我邦に適せずと云ふならば、之に代用すべき方法を講究せざるべからず、又西洋にありては幼稚園に於て殊に德育を授けざるも、朝夕家庭に於て宗教的德育を授くるなり。然るに我邦の家庭の多くは宗教的德育を缺けるものなれば、是非其幼稚園に於て之に代用すべき德育を授けざるべからず。

以上は我邦幼稚園の短所を指摘せるものなれば、今より大に講究を要するとなるも、我邦の教育家は小學以上の教育のみに意を注ぎ、幼稚園の如きは之を度外視する風あるは、亦今日教育の一大缺點なり。もとより其教育は小學教育の如く義務的のものにあらずして、任意的のものなれども、小學教育の地盤を固むるものにして、殊に德育躰育に於ては正しく其の素養を與ふるものなれば、決して之を輕視すべからず、其重要なる點に於ては一歩も小學教育に讓らざる道理あり、或は却て之よりも大切なる理由なきにあらず、故に今後教育家も大に幼稚園教育に意を用ひて深く其方法を考へざるべからず。

下流社會の幼兒を集めて之を保育するは上流社會の方よりも一層其必要を感ずるも、是れ全く慈善事業に屬する事なれば之を普及するは到底我邦現今の民力の及ぶ所にあらず、然れども茲に輕便なる一方法あり、即ち町村に遍在せる寺院を以て幼稚園に充つる一事なり、地方に在りては寺院は大抵幼兒の遊戯場となり、堂の内外自然に幼稚園の

形をなす。唯其の遊戯は兒童の勝手氣儘に任せ外より何等の制裁を加へず、監督を與へざれば其遊戯は惡戯となり、寺院の神聖を汚がし裝飾を損し風致を害するは勿論、兒童の教育上害ありて益なしとす。故に若し此等の幼兒を寺院の一室に集め、規律正しく且つ訓育上に益ある遊戯をなさしめ、修身上に關係ある唱歌を教へ、適當の制裁を加へ監督を與ふるに至らば、寺院と幼兒との兩方に利ありて、而かも町村の爲めに益する事尠からず。而して之れに要する所の經費は極めて少額にて足れりとす。其遊戯場は寺院の一室若くば堂宅及庭園を用ふるものなれば、別に建築する必要なし。又其保姆の如きは住職が妻帶するものとすれば、其妻に多少の練習をなさしむるを以て足れりとす保姆の練習は他の練習に比すれば短日月の間になし得べく、其他は實地の經驗を積むを要するのみなり。されば慈善的に實施する事頗る容易なりとす。又一方には神社の庭園を以て幼稚園に充つるも可なり又は小學教員の妻をして保姆を兼ねしむるも可なり、小學教員は薄給のもの多ければ其力にて妻子を養ふをかたし、若し其家をして幼稚園に充て其妻をして保姆を兼ねしむれば多少家政の一助ともなるべし、此等の方法によるときは全國に幼稚園を普及するを決して難事にあらざるなり

（日本の小學教師）

雜報

幼稚園保育法夏期講習會

來る七月廿一日より十日間、當フレーベル會に於て開かるべき同會は、實に東京に於ける幼稚園夏

期講習會の嚆矢なりといふべし。年々中小學校教員のために、此種の講習會ありて、教員の學力を補修し、教授法の改良に資することゝなり居れども、比較的發達の遲緩なる幼稚園に從事する保姆の爲としては、從來嘗て此種の講習會ありたることなし。これまことに遺憾の次第にして、幼稚園が其名の如く發達幼稚なりなどいはるゝは、一は此種の會合に由りて新しき思想を得べき便宜なき爲にも因るなり。學科及講師は別紙廣告の如く或は學理の上より或は實驗の上より嶄新有益の講演をせらるゝにて殊に本會々員は聽講料五十錢なりとのことにて、會費の廉なることも亦他に見るを得ず、現在幼稚園に從事せらるゝ方は勿論、苟くも兒童保育に注意せらるゝ方は奮つて、出席せられたきものなり。

京北幼稚園

文學博士井上圓了氏は、日露戰役紀念事業として、今回、小石川區富士前町に、幼稚園を設立し、去る五月三日開園式を擧行したり。地所は廣濶なる高臺にして園舍も清潔完美なりとのこと。主任保姆としては本會々員、林富美子之に當り、同じく會員富高たま子之に副として日々熱心に從事せられ居るといふ。博士の如き知名の教育家が、今日、幼稚園問題に着手するに至りたるは、まことに斯道の爲に喜ぶべきことにして、吾等は、この幼稚園の未長く健全の發達をせられんことを望むものなり。尙、機を得て參觀し詳細を報ずることあるべし。

足立孝子の名譽

本會々員、元東京府立女子師範學校幼稚園保姆

足達孝子は、夙に幼兒保育の事業に熱心なる興味を有し、同幼稚園にて日々從事せられしが、今回、皇孫殿下の御係として召し出され、先月十八日東宮御所に奉仕せられたりといふ。同氏の名譽、此上なきことゝいふべし

會報

入會

東京市本郷區駒込富士前町五一、京北幼稚園　富高たま
右林富み紹介　山内定治郎

女子高等師範學校
右東基吉紹介

會費領收

自明治三十八年四月廿五日至仝年五月廿五日

金額	年月日	姓名
六〇	三七、一一—三八、四	野尻てつ
六〇	三七、一一—三八、四	小谷野千代
五〇	三八、四—三八、八	西浦りつ
四〇	三八、一—三八、四	鈴木れい
五〇	三七、一〇—三八、二	小關せい
二〇〇	三六、一〇—三八、五	野崎秀
一〇〇	三八、二—三八、一一	馬場虎
三〇	三八、五—三八、七	室田美津
四〇	三八、四—三八、七	熊谷つま
一四〇	三六、一—三七、二	千崎如幻
一〇	三八、四	原しゆん
五〇	三八、四—三八、八	山崎芳代
五〇	三八、四—三八、八	酒井嶋
一四〇	三七、一—三八、二	福間恭
六〇	三八、一—三八、六	安藤さつ
五〇	三八、二—三八、六	木村茂枝
一二〇	三八、三—三九、二	岡松磯次郎
四〇〇	三五、二—三八、五	東もと
一〇〇	三八、三—三八、一二	原嘉賀
二〇〇	三七、二—三八、九	奥宮さだ
一〇〇	三七、九—三八、六	岡田起作
二〇	三八、三—三八、四	藤澤皐月
一二〇	三八、五—三九、四	小川吉益
五〇	三八、一—三八、五	大川多技
六〇	三八、五—三八、一〇	乙訓鯛助
六〇	三八、五—三八、一〇	福岡吳子
六〇	三八、五—三八、一〇	岩本金太郎
一〇	三八、五	岩本藤吉
一二〇	三八、五—三九、四	岩本芳子
三〇	三八、四—三八、六	鹽野吉兵衛
		土屋たまこ

明治の家庭

毎月一回一日發行定價一冊前金六錢六冊郵税共三十三錢十二冊金六十六錢

第一號

六月一日發行

目次

●此の雜誌の悟覺……發刊の辭
●婦人方は新聞の論說をお讀みなさい……記者
●お婆さん子は三百文安い……南摩
●こわれぬ玩具……
●靖ちやんの危篤とその父の禁酒……梓柳子
●奥樣の游戯……
●子供の育て方 ●灰遊ひをする子供 ●輕卒な女の子 ●あかちやんの水鼻をとる道具 ●家の整理 ●主人の朝寢を直す仕方 ●子供の靴 ●經濟の面白い問題二つ……東洋幼稚園長談
●泣く子のすかし方……芝山
●剛情の子供えのお伽噺……
●新婚の寫眞について……中津義
●洋服の洗濯法……瀧浦
●絹物を洗う石鹸と木綿物を洗う石鹸……
●福神漬の仕方 辨當料理 西洋菓子……
●母樣下さい帳……

發行所 東京市牛込區納戸町六番地 明治の家庭社

發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目 寶文館 電話本局二三一三番

(婦人と子ども第五巻第六號)
(明治三十八年六月五日發行)(毎月一回五日發行)

明治三十四年二月六日内務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

山葉製風琴ハ第五回内國博覽會ニ於 第壹等賞牌ヲ受領セリ

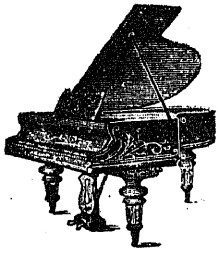
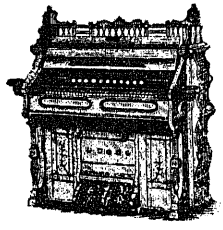
新刊音樂書

林廣守作曲、ノエルペリー先生和聲
一君が代 美本 定價金拾錢 不要郵稅
高須治輔先生作歌、本元子作曲
一滿西比利亞洲地理唱歌 頗美本 定價金拾錢 郵稅金二錢
北村季晴先生作(第參版發行)
一叙事唱歌第一篇須磨の曲 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
一第二篇全離れ小島 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
一第三篇全露營の夢 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
ノエル、ペリー先生編
一オルガン、ピアノ練習書 大形洋裝 定價金五拾錢 郵稅金八錢

ピアノオルガン
調律修繕

山葉製風琴
(保險附)

壹號形金拾六圓五拾錢
貳號形金廿六圓五拾錢
參號形金參拾七圓
四號形金參拾參圓
五號形金四拾八圓
六號形金五拾五圓
七號形金六拾五圓
八號形金七拾五圓
九號貳金百圓
十號形金百貳拾圓
メーソンモデル
第壹號金百參拾圓
全貳號金百五拾圓
全參號金貳百圓
新形壹號金八拾圓
全貳號金四拾五圓
足折形一號金廿五圓
全貳號金參拾五圓

○山葉製洋琴 各種 金參百圓以上

●船來洋琴 三百圓以上三千圓迄各種
●船來風琴 百圓以上千五百圓迄各種
○鈴木製ヴアイオリン 金五圓以上五十圓迄各種其他弓箱附屬品

●船來ヴアイオリン及弓箱等各種
●船來フラジオレット各樂器附屬品、和洋音樂書等各種
●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種
●戰捷紀念國旗印銀笛數種
●入人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓
右の外手風琴、ハーモニカ、船來

各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す

共益商社樂器店
東京市竹川區京橋三十番地
電話新橋五二九
電信略號ヨキ